

四萬部寺の施主の氏名・住所と供養対象が記載された勸募帳^{ちよう}から得られた二〇〇九年と二〇一一年の統計を比較すると、二〇〇九年から二〇一一年にかけて、家名を記さない「先祖代々」や「水子」が減少し、「戒名」「祈禱（現世利益）」が増加する傾向にある。男女差をみた場合、とりわけ顕著な変化は女性の「先祖代々」が二四・一%から一六・三%に減少し、「戒名」が二八・五%→二六・六%に増加したことである。その要因として嫁いだ女性が生家の父母を戒名で供養するといった妻方の死者供養のケースが増加した点があげられるだろう。

供養依頼者の分布状況を見ると、檀家をほとんどもない四萬部寺では、新盆供養が秩父市とその近隣市町村で慣習化しているため、供養依頼者の多くは埼玉県西部に集中しており、県内の霊場寺院である金乗院（山口観音）や永福寺（施餓鬼寺）のある所沢市・杉戸町とその周辺に四萬部寺の依頼者は少ない。二〇〇九年から二〇一一年にかけての依頼者数の増減をみると、県北部の深谷市・熊谷市・行田市・寄居町などの県北部や群馬県で増加し、秩父市近隣の東秩父村・横瀬町・小川町、県外では千葉県・東京都・神奈川県で減少している。増加の理由としては秩父地方の出身者が結婚などを契機に居住地を移しても供養を申し込んだり、秩父巡礼の際に四萬部寺での供養を知って申し込むことがあげられ、減少の理由としては新盆供養を菩提寺だけでなく四萬部寺でも行う慣習の衰退が考えられる。

供養対象においても緩やかな変化が見て取れたが、四萬部寺では依頼者においても同様の傾向が認められる。四萬部寺の供養を新盆供養のためにのみ行う人も多く、菩提寺のような継続

的な関係ではなく一年単位の短期的な供養形態であるため、地域によって増減が起こりやすく、その信者組織は流動性を帯びていると考えられる。

会津八葉寺では、先祖供養と新盆供養を兼ねる「冬木沢参り」に焦点をあて、インタビュー調査から得られた供養の経緯やその対象、動機について報告し、とくに原発事故による立ち入り禁止区域からの避難者が先祖供養をする事例に着目した。八葉寺の所在する会津若松市では大熊町役場が会津若松市役所に臨時窓口を設けたり、仮設住宅を設置するなど避難者の受け入れを行っている。避難者たちは家の墓地や菩提寺が福島県沿岸部にあるため、お盆の儀礼やお墓参りなどを営むことができなかったが、八葉寺のことを人伝で聞いたり、チラシを見て知ること、先祖供養を申し込む例がみられた。このことから八葉寺は「会津総菩提所」と称されるように檀家制度に依拠しておらず、様々な人々の供養を柔軟に受け入れているため、避難者たちの墓や菩提寺の代替的役割を果たした点を指摘した。

「生・死・死後」の色のイメージ

——美大生への質問紙調査から——

久保田 力

本稿は「芸術とスピリチュアリティ」に関する美大生（東北芸術工科大学）への二回目質問紙調査の結果から、生・死・死後の色のイメージについての分析報告である。一回目の結果は『印度学宗教学会論集』三七号に、二回目の全体結果は『東北芸術工科大学紀要』第一八・一九合併号に報告した。スピリチ

ユアルな色彩感覚についての研究報告は筆者寡聞にしていまだ本格的になされていないようであるし、色に対する意識や感性は芸術を志向する学生にとっては必須の課題なので一考の意義はあろうかと思う。

質問紙では計四六項目の質問をした。そのうち、以下の三項が今回のテーマである。

問二「あなたの現在の「生」を一色の色でイメージするとしたら何色ですか。また、その理由も簡単に答えてください。」問三は右と同文で、「死」の色を、問四は「死後」の色について問うた。一般には答えにくい質問であり、「一色」という限定にも無理があることを承知のうえで、芸術系の学生対象ならではの項目として挑戦的に問いかけた。

これらの質問への回答の単純集計結果は配布資料(略)の通り。「生」の色に関しては、多い順に、赤(一八%)、白(一五%)、青(一二%)、黄(約一〇%)、灰(約九%)、オレンジ(八%)、以下、緑、黒、ピンク、茶、紫、となっている。また、「死」の色に関しては、黒(三九%)、白(二六%)、灰(九%)、青(八%)、無色・透明(五%)、赤(三%)、紫(二%)等となっている。「死後」の色に関しては、白(三五%)、黒(一五%)、無色・透明(一三%)、灰(九%)、青(六%)、黄(五%)、緑(二%)、紫(一・八%)、赤(一・四%)、茶とピンク(各一二%)となっている。

いま、これらの結果の特色を際立たせるべく、特に色調の観点から、日本カラーデザイン研究所(NCD)の協力を得て分析を試みた。まず、生の色は、高彩度色(ヴィヴィッドトーン)

ン)への集中が特徴的である。半数以上が、最も鮮やかな彩度を持った色の名称を挙げている。次に、死の色は大きく黒と白二つの傾向に分類できるが、黒の方が白より一・五倍程度多い。一方で、赤や青、紫という「はで」なトーンを回答した者が一割以上存在する。「はで」で「あかるい」色も死の色と感じる学生が約一五%いる。死後の色も黒と白の両色に集中しているが、白は黒の二倍以上いる。ここでは「はで」で「あかるい」トーンを回答した者が二二%になる。すなわち、死後の色は死の色よりも七%程度「はで」で「あかるい」色相がより強くイメージされているのである。このような結果は「あかるい／くらい」と「はで／じみ」を縦軸と横軸にとってダイアグラム化(四トーン分析)するとよくわかる(図略)。今回の分析結果を要約すると、生の色イメージについては、赤、青、黄、白を中心とした、「あかるい」よりも「はで」な色彩感覚が目立った結果となった。このような結果は、仏教でいう五色つまり五大色(地Ⅱ黄、水Ⅱ白、火Ⅱ赤、風Ⅱ黒、空Ⅱ青)(五正色)や古代中国の五行説(木Ⅱ青、火Ⅱ赤、土Ⅱ黄、金Ⅱ白、水Ⅱ黒)に基づく色とほぼ対応している。従って、生の世界は、基本的にアジアの古代的な宗教的世界観による伝統色の配色に無意識的に結びついているものと推察されうる。今回紫色(仏教では五つの中間色の一つ)を回答した理由についても調査したところ、多くは迷いや不安、混沌、紫斑・腐敗といった負のイメージで、日本の伝統的な神聖さはほとんど意識されていなかった。また、今回の結果を色彩語彙という文化人類学の視点から見ると、その発展段階の初期型である白Ⅱ死後の世界、黒Ⅱ死

の世界、赤い生たる人間の世界という構成が基盤にあるように推察された。芸術志向の学生たちにもアジアというより、普遍的な人間的次元における原初的な色彩語彙感覚が看取された(詳細は『印度学宗教学会論集』三八号参照)。

看取りの前後における宗教民俗的な体験・想像・語り

相澤 出

本報告は、在宅ホスピス・緩和ケアの現場において、看取りとその後のなかで、遺族が綴った物語を検討し、在宅の看取りを経験した人々が、その経験をどのように受けとめたかを検討する試みである。二度にわたって実施された在宅ホスピス・緩和ケア遺族調査の自由記述をみる時、そのなかには、医療化され、その意味を医療的な死亡診断(死の三兆候などが確認される生理学的な死の瞬間)へと切りつめられた病院死とは異なる死のあり方が語られるケースが珍しくなかった。

いかえれば、この世との別れを、亡くなっていく人(在宅緩和ケアを利用した患者)と、それを見守る(そして見送った)周囲の人々との関係のなかでは、点ではなく長い時間的な経過としての看取りが今なお体験され、それをめぐる多様な物語が紡ぎだされていることがうかがわれた。その体験には、いわゆる宗教民俗的なものとの接点をもつものも含まれていた。これらの記述に注目し、それがどのような物語であるのか、どのような体験がなされ、語られ、記憶されているかを検討することを試みた。

本報告のもととなるのは、二〇一一年一月二三日から三月三

一日にかけて、宮城県・福島県で在宅ホスピス・緩和ケアをてがける六ヶ所の在宅療養支援診療所の協力をえて実施された調査である。質問紙郵送(全数)調査である。対象となったのは、二〇〇七年一月から二〇〇九年一二月の間に、協力先診療所の在宅ホスピス・緩和ケアを利用された患者の遺族である。郵送総数一一九一のうち五七五票を回収。回収率は四八・三%であった。

今回検討した記述には、病気(今回の調査対象者の場合、がん患者遺族が多い)の告知や発症からはじまり、在宅緩和ケアの開始、看病・介護をしながらの患者と家族の時間のおくり方の様子、臨終そして看取りのあとにまでいたる、それぞれの患者と家族(そして遺族)の間で織り成された、さまざまな体験が詳細に書き込まれているものが多々あった。

こうした記述からまず気付かされるのは、在宅看取りの現場における人々の観察の詳細さ、記述の重厚さである。その観察や記述をうながしたのは緊迫した、濃密な時間の流れと、患者とその周囲の人々の関係性の厚みである。患者と家族の体験は、反芻され、解釈され続けている様子もうかがわれた。

これらの観察者の目は、普段と異なるわずかな、ささいなことも見逃さない鋭いものであり、その記憶はかなり詳細なものである。そこで捉えられる事象には、多種多様な「不思議」とされる事柄が含まれるのも珍しくなかった。しかもそれらは、伝統的な民俗宗教的なものと接点をもちながらも、かなり自由な、型にはまらないものであった。在宅看取りの現場においては、亡くなっていく人、そして亡くなった人を中心としながら、